

一粒の麦が地に落ちて

ヨハネの福音書 12 章 20-26 節

はじめに

今日の聖書箇所は、「過越の祭り」に来た何人かの「**ギリシア人**」が、イエス様に会いたいと言ってきたという出来事から始まります。「過越しの祭り」は、ユダヤ人の祭りです。かつてエジプトの奴隷であったユダヤ人を、神様がモーセを通して解放してくださったことを記念する祭りです。しかし、ユダヤ人だけでなく、異邦人であるギリシア人の中にも、神様を礼拝し、「過越の祭り」に参加する人たちがいたようです。彼らは、割礼は受けていないけれども、旧約聖書を信じ、神様を信じていたのです。彼らは、イエス様の噂を聞き、イエス様に会いたいと思ったのです。

彼らは、まず弟子の「**ピリポ**」に、イエス様に会いたいと頼みます。「ピリポ」という名前は、ギリシア名なので、ピリポはギリシア語が話せたのかもしれませんが。そのため、ギリシア人たちは、まずピリポに話しかけたのでしょう。するとピリポは、「**アンデレ**」に事情を話します。アンデレは、ピリポと同じ「**ガリラヤのベツサイダ出身**」です（ヨハネ 1：44）。そこでアンデレとピリポは、二人でイエス様のところに行って、事情を話すのです。

アンデレとピリポの二人は、ヨハネの福音書の 1 章に登場してきますが、彼らは二人とも、イエス様のもとに人を連れて来る人でした。アンデレは、兄弟のペテロをイエス様のもとに連れて来て、ペテロはイエス様の弟子となりました。そして、ピリポは、ナタナエルをイエス様のもとに連れて来て、ナタナエルはイエス様の弟子となりました。

今日の聖書箇所でも、アンデレとピリポは、何人かのギリシア人たちをイエス様のもとに連れて来るのです。連れて来られた彼らが、イエス様の弟子となったかは書かれていませんけれども、今日の聖書箇所では、イエス様の弟子となるにはどうしたらよいか書かれているのだと思います。つまりクリスチャンとは、何を信じ、どういう生き方をしなければならないのか書かれているのです。

1. イエスが栄光を受ける時

イエス様は、23-24 節でこう言われます。「**人の子が栄光を受ける時が来ました。まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます**」。「人の子」というのは、イエス様のことです。イエス様は御自分のことを、「人の子」と言われます。イエス様は、「栄光を受ける時」が来たと言われます。「栄光を受ける」というのは、「称賛される」「敬われる」「崇められる」という意味ですが、別の言い方をすれば、その人が最も輝く時です。では、イエス様はいつ、最

も輝くのでしょうか。それは、「死ぬ時」です。十字架で死なれる時です。イエス様は、十字架で死なれる時に、最も輝き、「豊かな実」を結ばれるのです。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」という言葉は、聖書の中で最も有名な言葉の一つです。一粒の麦、あるいは種は、地に落ちて土の中に埋められて、はじめて実を結ぶのです。土の中に埋められず、ただ手に持っているだけでは、いつまで経っても実を結ぶことはないのです。同じようにイエス様も、土の中に埋められて、つまり死ぬことを通して、豊かな実を結ばれるのです。イエス様がもし、十字架で死ななければ、何の実も結ばれなかったのです。

では、イエス様が結ばれる「豊かな実」とは何でしょうか。それは、25節に出てくるように、「永遠のいのち」です。イエス様が十字架で死なれることによって、私たちに「永遠のいのち」がもたらされたのです。イエス様の弟子となるには、あるいはクリスチャンとなるにはまず、イエス様が私たちに「永遠のいのち」をもたらすために、十字架で死んでくださったことを信じなければなりません。

2. 自分のいのちを憎むとは

では、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」という言葉は、イエス様の十字架の死のことだけを言われているのでしょうか。どうやら、そうではないようです。実はこの言葉は、イエス様の弟子にも、つまりクリスチャンにも言われている言葉なのです。イエス様の弟子なら、クリスチャンなら、死んで豊かな実を結びなさいと言われているのです。なぜなら、25節でこう言われているからです。「**自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります**」。

自分のいのちを愛するのではなく憎みなさい、自分のいのちを憎む者が「永遠のいのち」を持つのだ、つまり「豊かな実を結ぶ」のだと、イエス様は言われるのです。「自分のいのちを憎む」とは、一体どういうことでしょうか。自分のいのちを嫌うということでしょうか。あるいは自殺するということでしょうか。そうではありません。これは、ユダヤ人特有の表現です。例えば、一人の男性が二人の女性を愛していたとします。どちらか一人を選ばなければならないので、より愛する女性を「愛する」と表現し、もう一方の女性を「憎む」と表現するのです。つまり選ばれなかったほうを「憎む」と表現するのです。それは、別に嫌いになったものではありません。ただ、選ばれなかったという意味なのです。聖書に、「**わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ**」(ローマ 9:13)という言葉がありますが、これは、神様がヤコブを選び、エサウを選ばなかったという意味で、別にエサウを嫌ったという意味ではありません。さらにイエス様は、こうも言われました。「**わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません**」(ルカ 14:26)。これは、自分の家族を嫌いなさいという意味ではありません。自分のいのちや家族を第一に選んではならない、自分のいのちや家族よりも

「愛するもの」を持ちなさいという意味です。

では、自分のいのちや家族よりも「愛するもの」とは何でしょうか。それは、イエス様のことです。イエス様に「**仕える**」という生き方です。「自分のいのちを愛する」という表現は、自己中心的な生き方を表す表現です。常に自分を選んでいくという生き方です。人よりも自分を優先し、神様よりも自分を優先していくという生き方です。それを「自分のいのちを愛する」と表現するのです。では、そのような生き方の行き着く先は、どのようなものでしょうか。それは、「自分のいのちを失う」というものです。この「失う」という言葉は、「滅ぼす」「壊す」「駄目になる」という意味の言葉です。私たち人間は、「自分のいのちを愛して」、人よりも自分、神様よりも自分というように、常に自分を選び、自分を優先して生きる時、いのちを滅ぼし、いのちを駄目にしていくのです。

イエス様は、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」と言われました。私たちは、イエス様と同じように、死ぬ時に豊かな実を結ぶのです。私たちはまず、「自分のいのちを愛する」生き方に死ななければなりません。そのような生き方を、土の中に埋めなければなりません。そうでなければ、私たちは「永遠のいのち」という「豊かな実」を結ぶことはできないのです。

おわりに

星野富弘というクリスチャンの詩人がいました。二年前に天に召されましたが、この人は、24歳の時に頸髄（けいずい）を損傷して、首から下が動かなくなりました。その後、クリスチャンになり、口に筆をくわえて水墨画と詩を書くようになりました。その詩の中に、こういう詩があります。「いのちが一番大切だと思っていたころ、生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日、生きているのが嬉しかった」。私たちは誰でも、自分のいのちや家族が一番大切だと生きてきました。しかし、イエス様に出会う時、自分のいのちや家族よりも大切なものがあると気づくのです。自分のいのちや家族を必死に守る生き方は、実はとても疲れます。私たちは、自分の力では、自分のいのちや家族を守り切れないからです。

イエス様は、26節でこう言われます。「**わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることになります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます**」。「自分のいのちを愛する」という生き方と対極にある生き方は、「イエス様に仕える」という生き方です。「自分のいのちを憎む」という生き方は、「イエス様に仕える」という生き方です。この方は、私たちに「永遠のいのち」を与えるために、十字架で死んでくださった方です。イエス様に仕えて生きていく時、イエス様がいつも共にいてくださるのです。イエス様に仕えて生きていく時、神様が私たちに重んじてくださるのです。だからこそ私たちは、「自分のいのちを愛する」生き方に別れを告げることができるのです。私たちのいのちや家族は、神様が重んじてくださるからです。私たちは、イエス様に仕え、私たちのいのちや家族は、神様にお委ねしていけばよいので

す。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」。私たちは、「いのちより大切なもの」を持っているでしょうか。自分のいのちを懸けてもよいと思うものを持っているでしょうか。自分が一粒の麦になってもよいと思うものを持っているでしょうか。私たちは、自分のいのちをどのように使っていくのか、そのことをイエス様に問われているのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、あなたによっていのちが支えられ、生かされています。しかし私たちは、「自分のいのちを愛する」生き方をひたすら歩んできました。人よりも自分、神様よりも自分、自分のいのちや家族を何よりも愛し、それを守ることに必死になって生きてきました。しかし私たちは、自分の力では、自分のいのちや家族を守り切ることはできません。それらを手放し、あなたに委ねることこそ、最も安全な道であり、永遠のいのちへと至る道です。どうか私たち一人ひとりが、いのちより大切なものを見出し、自分の限られたいのちを、そのために使っていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。